産経新聞
平成２５年（2013年）３月１６日　土曜日
H25.3.16

Dr. 和の町医者日記

「抗がん剤」シリーズ⑯

治療継続か生活優先か

「止めどき」が重要

ステージⅣの膵臓がんと診断されたB子さん(54)は、抗がん剤の相談で来院。専門病院で手術不能と判断されました。点滴の抗がん剤とTS－1という飲み薬の治療が開始され、腫瘍マーカーの値は半分まで低下。しかし、その半年後には食欲低下と、体重7キロ減へ。

「このまま抗がん剤を続けるべきか？　でも、もう疲れたわ」と話すB子さんに私は「休むという選択肢もあるのでは？」と提案。B子さんはその言葉に反応し、抗がん剤治療をピタッと中止。「止める！　と決めたら、気が楽になり元気が出ました」と笑顔です。

同時に長年勤務していた商社も退職。その1カ月後、こう言われました。「先生、私、これから沖縄に移住するの」。「ええ？　沖縄？」。B子さんは子供なしのバツイチ。仕事一筋に生きてこられました。

沖縄は、再婚していない元夫が暮らす街。余命が長くないと悟ったB子さんは元夫に相談。彼は「俺がお前の死に水を取ってやる」と言ってくれたそうです。

抗がん剤を止めて沖縄で暮らすB子さんから時々メールが届きます。2匹の犬とゆっくりした時間が流れる沖縄では、背部の痛みもかなり和らいでいるようです。地元の病院で緩和医療を受けながら、のんびり暮らしておられます。

C子さん(28)は胃の痛みで当院を受診。スキルス胃がんで、もはや手術不能でした。入院と外来で3カ月間、抗がん剤治療でがんと闘ってきました。しかし、体重は減るばかり。在宅での栄養剤の点滴と緩和医療を依頼されました。

C子さんもバツイチですが、5歳になる男の子がいます。病院で抗がん剤治療の間は子供と遊べないのが悩み。子供を実家の両親に預けての治療継続。しかし、ある日、C子さんは飲み薬の抗がん剤を含めて治療を全部中止。副作用が相当辛かったようです。

中止後は実家で両親の援助も受けながらの生活へ。「子供と遊んでいる時間が一番楽しい」と子供との時間を優先されました。抗がん剤が効かなかったことも中止の決断を早めました。結局、抗がん剤を止めてから2カ月後に、実家で両親に見守られる中、旅立たれました。子供がいなければ、もう少し長く抗がん剤治療を続けていたかもしれません。

Dさん(83)は、肺がんで抗がん剤治療を3カ月間続けてきました。しかし衰弱が著しく、当院に在宅医療を依頼されました。自宅で栄養剤の点滴をしながら、抗がん剤治療のため息子さんに病院に連れて行ってもらう日が2カ月間続きました。

抗がん剤を投与した日は、かなり衰弱されます。強い背部痛に、麻薬を使おうとしました。その説明の中で「緩和医療」という言葉を使ったら激怒されました。息子さんは「緩和医療」＝もうお手上げと誤解されていたのです。

「先生はもうあきらめているみたいやけど、絶対、あきらめへんからな！」。これが息子さんの口癖でした。結局、息子さんはぐったりしたお父さんを車に乗せて、亡くなる前日まで外来抗がん剤治療に通われました。

以上、抗がん剤治療は止めどきが一番難しいと思います。始めるのは簡単ですが、引き際は実に難しい。主治医とよく相談のうえ、できれば自己決定してください。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

緩和医療　肉体的、精神的な痛みを薬物や非薬物治療で和らげる医療。がんと診断されたときから、緩和医療が始まる。最近は、がんに限らず、すべての病気に適応される概念とされている。